

令和四年度 九州国際大学付属高等学校

国語 入学試験問題

問題用紙（1～16ページ） 試験時間（50分）

注意事項

1. 試験問題は、試験開始の合図があるまで開けないこと。
2. 試験開始後、問題冊子の印刷の不具合などに気付いた場合は手を挙げて監督者に申し出ること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 携帯電話、計算機、アラーム等の使用は禁止する。
5. 体調不良等の場合は、監督者に申し出ること。
6. 問題用紙は、各自持ち帰ること。

人間は誰しも、ほかの人々との関わりのなかで暮らしています。他者の評価がまったく気にならない者など、この世には存在しません。

他者のまなざしにとらわれ、振りまわされそうになったとき、そのボウハ^① テイとなるのはやはり「個」なのでしょう。「他人がどう思おうが自分は自分だ」と思えるような核となる自己が育っているかどうか。

そういう確固たる「個」は、自分の頭で考え抜くと同時に、互いの意見をぶつけ合いながら人間関係を深めていったり、ときには周囲の声に抗^{あひか}つてでも自分の意思で選択し行動することによってしか鍛えることができない。

前述のように、古来、個人より集団を重んじてきた日本社会では、欧米人以上に他者というものを気にせざるを得ませんでした。

Ⅲ、どうしても「場」の空気を読んで自分を抑えてしまう傾向が強く、「個」というものが育ちにくい。「個」が鍛えられていないため、よけいに他者の目や評価が気になる。^② そんな出口のないメビウスの輪にとらわれている人が、たくさんいるように思えます。

ただ、心の健康や幸福という観点から見ると、常に他者の目を気にしながら生きるより、「自分は自分」とどこかで開き直れる強さをもっていたほうがいいのは確かでしょう。

他者を^③ カジヨウに意識することは、言い換えるなら、自分の評価を他人にゆだねてしまっているということ。そして、そういう人ほど、ちょっとしたこと傷ついてしまう。

Ⅳ、失敗や挫折^{さつせつ}をすると、もう立ち直れないように感じる。反論されただけで、自分の全存在を否定されたように思う。上司が不機嫌なのは体調が悪いせいかもしれないのに、自分を嫌っているからではないかと不安になる……。

なかには、思うように認めてもらえないことで自信をなくすだけでなく、鬱屈^{うっくつ}した怒りを募らせていく人もいます。また、他人から本当にそう見られているわけでもないのに、「私はこう思われているに違いない」という自身の思い込みに踊らされ、精神のバランスを崩してしまうケースも多い。人間にとって、他者に認められることは大きな喜びです。しかし、だからと言って、自分の評価を他人だけにゆだねてしまっただけはいけない。自分を自分で評価できること、自分という人間がこれから変わっていく可能性を秘めていることを忘れてしまったとき、人は自らを不幸へと追いやることになるのです。

(加賀 乙彦 『不幸な国の幸福論』から)

(注) 先ほど…: しました —— 本文直前をふまえた記述。なお、筆者は精神科医であり、「統合

失調症」は、考えや気持ちがあまとならなくなる精神疾患のこと。

問一 二重傍線部①～⑤に相当する漢字を含むものを、次の各群のA～Eの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① モウレツ

- A 体操隊形でセイレツする。
I 物事のユウレツを見極める。
ウ ゲキレツな展開に感動する。
E 国同士の交渉がケツレツした。

② マイボツ

- A マイゾウ金を探し当てる。
I 資料のマイスウを確認する。
ウ マイニチ野菜を食べる。
E 動物園でマイゴを保護する。

③ ケンチョ

- A ケンメイな判断をする。
I 場がケンアクな空気になる。
ウ 公害問題がケンザイ化する。
E 出版物をケンエツする。

④ ボウハテイ

- A 容体はアンテイしている。
I 最新機器でカイテイを探る。
ウ オンテイを外さずに歌う。
E 港のトツテイで釣りをする。

⑤ カジヨウ

- A 仲間の危機にカセイする。
I カチュウの人物と話す。
ウ 製作のカテイを記録する。
E 未来のためにカコンを絶つ。

問二 空欄 に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア さらに イ ところが ウ たとえば エ むしろ オ だから

問三 傍線部①「そういう社会では、当然のことですが『個』が育ちにくい」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 権威のある年長者の意見を優先させてしまうため、相手が間違っていると思っても反論することが認められないから。
- イ 意見を出し合う際に、その場の雰囲気が悪くならないようにするため、適当なところで妥協して主張することがないから。
- ウ 何を考えているかわからないと周囲から嫌われることがないように、周囲に気をつかい自分の意見を全く言わないから。
- エ 同じ興味を持った人同士としか仲間意識を持つことはなく、元々の考え方が一致するので対立することはほぼあり得ないから。

問四 空欄 ・ に入る最も適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア みんなに誤解されてしまった
- イ みんなと違ってしまった
- ウ みんなから孤立してしまった
- エ 自分の信用が失われ、人に信じてもらえなくなった
- オ 自分の個性が失われ、人と同じになってしまった
- カ 自分の居所が失われ、人から疎外されてしまった

問五 傍線部②「そんな出口のないメビウスの輪」とありますが、筆者はここでどのようなことを表現していますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人の「個」に関する感覚が昔から全く変化していないことを表現している。
- イ 日本人の「個」に関する意識が同じ方向へと収束していることを表現している。
- ウ 日本人の「個」に関する価値観が日本社会で画一的であることを表現している。
- エ 日本人の「個」に関するとらえ方が悪循環に陥っていることを表現している。

問六 本文には次の一文が抜けています。どの文の前に入りますか。直後の文の最初の五字を抜き出して答えなさい。

だから欧米は優れていて日本は劣っているとやっているわけではありません。

問七 本文の論の構成や文章の展開に関する特徴を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人の特質を、経験にもとづく事例をふまえて欧米と比較し、分析している。
- イ 日本人が抱える問題点を挙げ、欧米の事例を参考にその解決法を提案している。
- ウ 日本人の人間関係に関する一般論を批判しながら、独自の見解を述べている。
- エ 日本人が考える対人関係について、具体例を挙げて問題点を明らかにしている。

問八 本文の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人が失敗や挫折^{さげす}をするともう立ち直れないように感じるのは、どうしても「場」の空気を読んで自分を抑えてしまう傾向が強いため、改善しなければならぬ。
- イ 日本人は他者の目を強く意識するがゆえに周囲の人と同じような行動をとる傾向が強いのは確かだが、これからは欧米のように「個」を強く主張する必要がある。
- ウ ささまざまな民族や文化がせめぎ合いながら国家というものを形成してきたヨーロッパでは、日本よりも多様性という考え方に対して柔軟な対応を行うことができている。
- エ 他者の評価がまったく気にならない人は存在しないが、他者に振りまわされるよりも「自分自分」と開き直れるような強さを持っていた方がいいのは確かである。

問九 波線部『個』として自立した人間』とは、どのような人間だと言えますか。本文中の語句を用いて、三十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高校生の栢山は、同学年の七加に誘われて数学研究会に入り、数学の古書店を経営している十河の所に行く。十河から三冊の数学の問題集を渡され、「すべての問題を、見た瞬間に手を動かさず頭の中でそれで解けるようになったら、また来い」と言われる。理由が分からないまま十河から渡された問題集に取り組んだ後、栢山はインターネット上の数学好きが集まるサイトで数学の問題を解く決闘において対戦相手に勝利する。以下の文章は十河のもとを再び訪問した時の場面である。

外で夜の風が吹いて、葉がざわめくのが遠くに聞こえた。あとは、時計の輪唱だけ。

古めかしい橙灯に染まった本たちのつくる影が本棚を迷宮にしている。目の前では、七加が本を読んでいる。支度をしながら、待つのか？ と問うと、待ちますよ、と当たり前のように答えが返ってきた。

ずっと同じ問題を解き続けていたから、新しい問題に触れるのは久しぶりだ、と紙と鉛筆を用意する。知らない問題に、まささらな問題に飛び込む。

こんなに気持ちが高鳴るものだったっけ。

まるで、雪の原に最初に走り出すように。

少し笑っているかもしれない。

合図が鳴り、飛び込んで、解き始めていく。

前と同じ時間、同じ出題範囲。まったく一緒なのに。

何かが違う。

これまで問題を解いていて感じたことのない、不思議な感覚にたびたび襲われる。

ひとつの問題を読むと、三冊で覚えた別の問題が頭に浮かんでくる。そうしようと思ったわけでもないのに。なぜだろうと思った矢先に、似ていると誰かが囁く。そうか、あの手触りの論理を使えるのではないか。問題の形自体は全然違うけれど。答えが隠れている範囲を狭めていくのに、同じ論理を使うことができるんじゃないか。

次の問題に進み、しばし考えると、今度はいくつかのアプローチが自然と浮かび上がってきた。

ひとつの問題について、これまでは感覚で解き方を文字通り手さぐりしていたが、今は自分の中に沈殿していたいくつかの論理の手触りが浮上してくる。この解法でも解ける。あの解法でも解ける。時間を一瞬忘れて、どちらの解法も試みてしまう。同じ問題が、違う解法、まったく違う論理構造で解けることを目の当たりにして、その新しい感覚に眩暈を覚える。

それまでと違う風景の中にいた。

問題は独立しているものだった。目の前にひとつの問題がぼつんと存在しており、問題文にどん

な手掛かりがあるかを考え、その手掛かりを ^I ためつすがめつしながら道を見つけていくのが、今までやってきた、問題を解くということだった。問題を解くとは、そういうことだと思っていた。

しかし、^③ 今、目の前に現れている問題は、孤独ではなかった。三冊の本の中にあつた無数の問題、それが自分の中にさんざめいて、問題に触れるたびに、まるでルービックキューブががちがち回るようにいくつかの問題が周りに自然に現れ、あるいは頭の中に新しく棲みついた固有の手触りをもつ解法のいくつかが浮かび上がってきて、まるで星座のように目の前の問題につながり、包囲し、ひとつの光景を描く。

誰も知らない深海のような宇宙に、^{II} 黄金色の音が未知の星座を既知の手触りで描いていく、その只中にいた。

ここはどこだろう。

^{II} まぎれもなく自分の中にあるのに、^④ 初めてたどり着いたこの風景は。

いつも何もない白い世界で、目の前の問題という扉をこじ開けようとした。たったひとりで。それなのに。

^⑤ 今いるこの場所は、広く、自由だった。

自分が今までいた場所が、あんなに自由だと思っていたのに。

今では、どこにも行けない、狭くて何もない場所だったと知れた。

どこまでも行ける気がする。

ここは、どこだろう。

「数学世界という言葉がある」

決闘を終えて我に返ると、猫を膝の上に乗せて、本を読んでいる七加が目前にいた。終了に気づいて、眼鏡を中指で押し上げながら、本を閉じる。

静かだった。何時だろう。

栢山が、カウンターにいる十河に決闘のさなかに感じたことを問うと、十河は珈琲を飲みながらその言葉を口にした。

「同じ問題を見ている、誰もが同じものを見ているわけじゃない。何かと近いと考えている人間もいれば、別のものと近いと考えている人間もいる。同じ問題でも、どうアプローチするか、それは人それぞれで浮かんでくるものが違う」

「なぜですか」と問うたのは、七加だった。

「どんな順序で数学を学んできたか。どんなふうに学んできたか。どこに面白と感じたか。それは人それぞれ違う。その違いが、それぞれの頭の中に、違う風景をつくる」

「違う風景」

「数学的風景。それぞれの人の中に、それぞれの数学世界がある」

それは、数字だけではできていない。数字と、論理でできている。お前は自分の数学感覚だけで問題と取っ組み合ってきたから、頭の中に論理のストックがまるでなかった。三冊を繰り返して、手を動かさずとも暗唱できるようになるまでやったのは、頭の中にさまざまな論理を詰め込むためだった。

「お前の中でどんな数学世界ができてきたかは、誰も知らない。お前しか知らない。でも、少なくとも、なにがしかの風景ができてきたことは分かった」

⑥ さぼってなかったんだな、と十河が付け足す。やっぱり疑ってたんすか、と呆けたままだに栢山は答える。

「ピタゴラスの定理の証明方法がいくつあるか知ってるか」

直角三角形の三つの辺の関係を示した定理。 $a^2 + b^2 = c^2$

それを導く証明の方法は、400以上ある。

同じ結論にたどり着く方法は、ひとつじゃない。

⑦ 「数学は、無機質で、硬質で、冷たくて、誰が見ても同じに見えるもの、と思われているけれど、それは違う」

十河が億劫そうに話す。七加は、栢山の手元にあるタブレットに手を伸ばし、結果を確認する。

「数学に取り組んでいるとき」

七加は口元をほころばす。二十六対二十四で、栢山は勝っていた。しかし栢山は初めて勝ったことも忘れたように、十河の話に耳を傾けている。

「ひとりひとりが、見えない景色を見ている」

そして、違う風景を見ている。

自分がそれを求めていたのだと、知った後に、気づく。

感謝をどう表しているのか分からず、立っていると、十河はちらと見る。

「ありがとう、と言え。それだけでいい」

ありがとうございます、と栢山は言った。

(王城 夕紀『青の数学』から)

問一 傍線部Ⅰ～Ⅲの本文中における意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ ためつすがめつしながら

- ア 時間をかけて丁寧に考えながら
- イ あらゆる角度から念入りに見ながら
- ウ 多くの人に尋ね求めながら
- エ 書いたり消したりしながら

Ⅱ まぎれもなく

- ア 大した考えもなく
- イ たとえようもなく
- ウ 確かめる方法もなく
- エ 間違えようもなく

Ⅲ 億劫おっくうそうに

- ア 相手の反応を確かめるように
- イ 自信がない様子で
- ウ めんどくさな様子で
- エ 一言一句かみしめるように

問二 傍線部①「不思議な感覚」とありますが、どのような感覚ですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 忘れていた過去の記憶が、なぜか頭の中に次々と浮かんでは消えていくという感覚。
- イ 見覚えの無いはずのものが、なぜか心当たりがあるように感じて理解出来るという感覚。
- ウ 今まで何とも思っていなかったものが、なぜか急に意味があるように思われるという感覚。
- エ あれほどこだわっていた勝負の行方が、なぜかどうでもよくなってしまおうという感覚。

問三 傍線部②「三冊」とありますが、十河が栢山に三冊の問題集を渡した目的は何ですか。その目的が示された一文を本文から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問四 傍線部③「今、目の前に現れている問題は、孤独ではなかった」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今まではその問題だけから手掛かりを得て手探りで試行錯誤しながら解いていたが、今は似た問題の理論や解法との関連が感じられ、数学の世界の広がりが見えるようになったというこ
うこと。

イ 今までは自分自身の力だけで問題を解かなくてはならなかったが、今では多くの理解者や協力者のおかげで、助けられながら、一緒に問題を解くことができるようになったとい
うこと。

ウ 今までは公式に当てはめたり、手掛かりを教えてもらったりすることでしか解答できなかったが、今は自分の数学感覚を駆使して解くことができると感じられるようになったとい
うこと。

エ 今までは数学の問題の答えはたった一つだと独りよがりと思っていたが、十河から渡され
た三冊の問題集を解いたことにより、今では無数の答えにたどり着けるようになったとい
うこと。

問五 傍線部④「初めてたどり着いたこの風景」とありますが、十河はこれを何と呼んでいますか。本文から五字で抜き出して答えなさい。

問六 傍線部⑤「今いるこの場所は、広く、自由だった」とありますが、この時の栢山の状態につ
いての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 多くの問題を解いた結果、理解できなかった問題の解法を理解できるようになり、自由自
在に問題を解くことができる現在の自分に対して強い自信を持っている状態。

イ 難しい問題を解くようになり、今まで狭きょうしょう小な世界にすることに満足していた自分に気づ
き、そのような世界から抜け出せなかった自分に対して後悔している状態。

ウ 同じ問題を解いていても、これまでと異なる論理構造で問題を解くことができるというこ
とに気づき、そうした新鮮な世界の中にいる自分に対して戸惑っている状態。

エ 十河に言われた通り懸命に問題を解いただけなのに、次々と新鮮な発見をして変わってい
く自分を確認し、自分に対して言い表しようの無い快感を感じている状態。

問七 傍線部⑥「さぼってなかったんだな」、⑦「数学は、無機質で、硬質で、冷たくて、誰が見ても同じに見えるもの、と思われているけれど、それは違う」とありますが、こうした発言をした十河の態度として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が出した課題に対して努力をし、独自の数学世界に達した栢山を認める一方で、成長した栢山に対して数学に対する新しいものの見方を教えようとしている。

イ 栢山の力を見誤っていたことを反省し、今では高く評価していることを告白する一方で、数学に対する一般的な考え方を否定して独自の考えを述べようとしている。

ウ 自分が出した課題の意味も分からないままに懸命にやり遂げた栢山を皮肉っぽくほめる一方で、数学に対して栢山が慢心しないよう、認識の甘さを正そうとしている。

エ 予想に反して課題をこなしてきた栢山に対して驚く一方で、まだまだ我流で解いており、未熟で教えなければならないことが多い栢山を注意しようとしている。

問八 この文章における表現の特徴について説明したものとして、適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「深海のような宇宙」や「決闘のさなか」といった表現を用いることにより、栢山が置かれている状況を生き生きとした言葉で伝える効果がある。

イ 栢山の視点を中心として本文の描写はなされているが、何度も七加や十河の視点を導入することで、栢山への客観的な評価を提示する効果がある。

ウ 本文には多くの自然の景色が描かれており、そうした描写は栢山が直面している数学の世界が幅広く、豊かなものであることを暗示する効果がある。

エ 本文に多く使用されている擬態語や擬音語は、栢山が思い描く抽象的で描写することが難しい観念的な世界を分かりやすく想像させる効果がある。

オ 頭の中で思い描いている世界から目の前の実在する事物を描写することで、栢山が観念的な世界から現実的な世界へと戻ったことを示す効果がある。

問九 次に示すのは、四人の生徒が本文を読んだ後に話し合っている場面です。本文の内容をふまえて、趣旨に最も近い発言を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A —— 僕はこの話を読んで、数学はその人が持って生まれた独自の感覚によって解くものだということが分かったよ。凡人である栢山はライバルたちにやっとのことで勝てたけど、生まれつき才能が無い人間は懸命に努力をするしかないってことだよね。

イ 生徒B —— 私は、思いつく解法を手当たり次第に試していくやり方が栢山の良さだと思ったわ。解く問題から手掛かりを見つけ出す才能も、彼が数学を怠けずに追究してきたから身についたと思うのよ。ひらめきと努力で身につけたスピードが勝因じゃないかしら。

ウ 生徒C —— そうかな。多くの問題を解いて基礎力を身につけたり、多くの解法の型を学んだりして、数学に対する経験を積んでいくことが大切だと感じたけどな。栢山が勝ったのは生まれ持った感覚やスピードではなく、多くの演習をこなしたからじゃないかな。

エ 生徒D —— 数学的思考は大切だけど、「数学」という分野に縛られてはだめだよね。七加のように多くの本を読んで幅広い知識を身につけることで、数学の問題を解く時に幅広い視点から問題に取り組むことができるようになるということに気づかされたわ。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔、愛宕(あきた)の山に、久しく行ふ聖(ひじり)ありけり。年(とし)ごろ行ひて、坊(ぼう)を出づる事なし。西の方に獵師(注1)

あり。この聖を貴(たか)みて、常にはまうでて、物奉(たてまつ)りなどしけり。久しく参らざりければ、餌袋(あぶくろ)
に干飯(ほしひ)など入れて、まうでたり。聖悦(よよし)びて、日ごろのおぼつかなさなどのたまふ。その中にぬよ

食へ物などをさし上げていた

りてのたまふやうは、「このほどこいみじく貴きことあり。この年ごろ、他念なく経をたもち奉りて

ある験(しるし)やらん、この夜ごろ、普賢菩薩(ふけんぼさつ)、象に乗りて見え給(たま)ふ。今宵(こよひ)とどまりて、拝み給へ」と
お陰であらうか

言~~~~~ひければ、この獵師、「よに貴きことにこそ候(まか)ふなれ。さらば、泊りて拝み奉らん」とて、とど
まりぬ。

さて聖の使(わら)ふ童のあるに問ふ、「聖のたまふやう、いかなることぞや。おのれも、この仏をば

拝み参らせたりや」と問~~~~~へば、童は「五六度ぞ見奉りて候ふ」と言ふに、獵師、われも見奉るこ
ともやあるとて、聖の後(うし)に、いねもせずして起きゐたり。九月二十日のことなれば、夜も長し、

今や今やと待つに、夜半(よ)過ぎぬらんと思ふほどに、東の山の峰(みね)より、月の出づるやうに見えて、

峰の嵐もすさまじきに、この坊の内、光さし入りたるやうにて、明(あ)くなりぬ。見れば、普賢菩薩

白象(びやくやう)に乗りて、やうやうおはしはべり、坊の前に立ち給へり。

聖①泣く泣く拝みて、「いかに、ぬし殿は拝み奉るや」と言ひければ、「いかがは、この童も拝み
(注6)

奉る。をいをい、いみじう貴し」とて、獵師思ふやう、聖は、年ごろ、経をも保ち、読み給へば
おうおう

こそ、その目はかりに見え給はめ、この童、わが身などは、経の向きたる方も知らぬに、見え給
へるは、心得られぬことなりと心のうちに思ひて、このこと試~~~~~みてむ、これ罪得~~~~~べきことにあ
③

らずと思ひて、矢(や)を弓につがひて、聖の拝み入りたる上よりさし越して、弓を強く引きて、

ひやうと射たりければ、御胸のほどに当るやうにて、火をうち消つごとくにて、光も失(う)せぬ。谷
ひまじつて

へどどろめきて、逃げ行く音す。聖、「これはいかにし給へるぞ」と言ひ、^④泣き惑ふこと限りな
し。男申しけるは、「聖の目にこそ見え給はめ、わが罪深き者の目に見え給へば、試み奉らむと思
ひて、射つるなり。まことの仏ならば、^Ⅲよも矢は立ち給はじ。されば、怪しきものなり」と言ひ
けり。

夜明けて、血をとめて行きて見ければ、一町ばかり行きて、谷の底に、^(注7)大きな狸の、胸より
血の跡をつけていって

尖り矢を射通されて、死して伏せりけり。

聖なれど、無智なれば、かやうに化かされけるなり。獵師なれども、^{おもんばかり}慮ありければ、狸を射
殺し、その化けをあらはしけるなり。

『宇治拾遺物語』から

- (注) 1 愛宕の山 —— 京都市の北部にある山。山頂に神社があつて、古く愛宕権現とし
てあがめられた。
- 2 聖 —— 徳や行いの優れた僧。
- 3 坊 —— 僧侶の住む所。僧坊。
- 4 餌袋 —— 鷹の餌を入れて持ち歩く袋。後には食物を入れて持ち歩くもの。
- 5 普賢菩薩 —— 時を選ばず、あらゆる場所に現われて、人々を教え導き救つてく
れる菩薩。
- 6 いかがは —— 「いかがは拝み奉らざらん」の略で、「どうして拝み申し上げない
ことがありますでしょうか」の意。
- 7 一町 —— 「町」は距離の単位。一町は一〇九メートル。

問一 二重傍線部「ゐよりてのたまふやうは」を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部Ⅰ～Ⅲの口語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 年ごろ行ひて

- ア 一年中休むことなく深い山にこもり、規則正しく生活して
- イ かなり長い年月にわたって経を唱え、仏に祈りをささげて
- ウ 一人前の僧侶として自分の信念に従い、世間との交わりを絶って
- エ 仏教に親しむのにふさわしい年齢になり、信仰の場を山に移して

Ⅱ いねもせずして

- ア 逃げ出すこともなく
- イ 疑うこともなく
- ウ 音を立てることもなく
- エ 寝ることもなく

Ⅲ よも矢は立ち給はじ

- ア 決して矢を射させたりはしないはずだ
- イ 矢が当たっても立ちなさっているだろう
- ウ 余程のことがない限り矢は当たるはずだ
- エ まさか矢はお当たりにならないだろう

問三 波線部 a 「言ひ」、b 「問へ」の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 聖 イ 獵師 ウ 普賢菩薩 エ 童

問四 傍線部①「泣く泣く」、④「泣き惑ふ」とありますが、「泣」いた聖の感情はどのようなものだと考えられますか。最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 焦燥しょうそう イ 思慕しほ ウ 歓喜 エ 失望 オ 嫉妬しど カ 混乱

問五 傍線部②「獵師思ふやう」について、具体的内容が書かれている部分はどこからどこまでですか。本文から抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問六 傍線部③「このこと試みてむ」について、次の二つの問いに答えなさい。

(1)「このこと」とは具体的には誰にどのようなことをする行為ですか。解答欄に合うように五字以上十字以内で答えなさい。

(2) その行為に及んだ原因として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見え給へるは、心得られぬことなり

イ これ罪得べきことにあらずと思ひて

ウ 谷へとどろめきて、逃げ行く音す

エ わが罪深き者の目に見え給へば

問七 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「久しく行ふ聖」は心をこめて鳥獣の霊をなぐさめていたが、愛宕山の僧坊に行ってから
は、そこにもって外出することもなく、いつそう熱心に供養くようを続けた。

イ 「この獵師」はお供えするために餌袋に食べ物を入れ聖の元を訪れたところ、聖から普賢菩薩を拜むように強要され不愉快な気持ちになった。

ウ 「聖の使ふ童」は経本の向きもわからないほど無教養であったが、聖の元で熱心に修行を続けるうちに、普賢菩薩の姿を見ることができるようまでに成長した。

エ 「この仏」は夜になると白象に乗って愛宕山の聖の元に現われ、その際、峰にはすさまじい風が吹き、坊の内は光がさしたように明るくなった。

問八 この説話から得られる教訓として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一つの物事に没頭して理性による判断ができないと、道理に合わないことも無批判に受け入れてしまうことになる。そのため、批判する態度を忘れず臨機応変りんぎおうへんに対処し、合理的に考えることが大切なのだと戒めている。

イ 世間の高い評価を得ても、時が経つと一度身に付けた知識や技術は通用しなくなり、その人も評価されなくなる。そのため、自身の知識や技術に対して満足することなく、向上心を持ち続けることの重要性を説いている。

ウ ある事柄について学識と経験を深めたとしても、特定の問題にしか対応できない。そのため、専門外の物事については謙虚で冷静な態度で臨む必要がある、他者の意見をできる限り素直に受け止めるように訴えている。

エ 自分が興味をもつものだけにこだわり続けると、周囲に関心が向かなくなり視野が狭くなる。そのため、特定の物事に執着することなく、あらゆる事柄と一定の距離を保ち続けて、広い視野を確保すべきだと教えている。

